

<研究報告>

『ピーターラビット』シリーズ及び『不思議の国のアリス』におけるウサギを表す英単語の使い分け

金子史彦 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：『ピーターラビット』, 『不思議の国のアリス』, ウサギ

1. はじめに

ビアトリクス・ポター (Beatrix Potter) の『ピーターラビットのおはなし』 (*The Tale of Peter Rabbit*) に始まる一連のピーターラビットシリーズの作品群とルイス・キャロル (Lewis Carroll) の『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*) は共に近代のイギリスの有名児童文学であるが、おもしろいことに共に複数の主要キャラクターとしてウサギが登場する。さらに興味深いことは、それらは同一の作品に登場するウサギのキャラクターに、日本語では全てウサギと十把一絡げに訳されることが多い rabbit, bunny, hare と異なる語句を使った名前が付けられていることである：前者はピーターラビット (Peter Rabbit) やベンジャミンバニー (Benjamin Bunny) 等、後者はホワイトラビット (the White Rabbit) とマーチヘア (the March Hare) というように。¹これは多くの読者が疑問に思うことではないのではあろうか。みていくとあきらかなように、『ピーターラビット』シリーズは特に読者を困惑させる面がある。

なぜポターやキャロルはこのようなことをしたのか。読者がどのように反応することを期待したのか。Rabbit, bunny, hare の元来の定義や実際の動物の特性と作品に登場するそれらの名詞をその名に冠したキャラクターの特性、描かれ方、それらの名詞の使用され方を照らし合わせながら、ウサギを表す異なった英単語がどのように使い分けられているのか、それによってどのような効果もたらされているのか、作者・作品の意図はどのようなものなのか等を分析することが本稿の目的である。

2. 『ピーターラビット』シリーズにおける rabbit と bunny の描かれ方

『ピーターラビット』シリーズの作品、少なくとも『ピーターラビットのおはなし』 (*The Tale of Peter Rabbit*) , 『ベンジャミンバニーのおはなし』 (*The Tale of Benjamin Bunny*) , 『フロプシーのこどもたち』 (*The Tale of the Flopsy Bunnies*) , 『キツネどんのおはなし』 (*The Tale of Mr. Tod*) のウサギが活躍する四作品には hare をその名に冠したキャラクターは登場しない。Rabbit と bunny のみである。Longman Dictionary of Contemporary English における rabbit の項目で動物のウサギにあたる定義は: “a common small long-eared animal that lives in a BURROW (=a hole it makes in the ground), and which is often kept as a pet –compare HARE”

(854) である。一方 bunny は“(used esp. by or to children) a rabbit” (128) となっている。つまり rabbit と hare は別種、生物学的に異なる存在であるが、rabbit と bunny は同一の存在であり、『ピーターラビット』シリーズに登場するウサギのキャラクターは生物学的に見れば全て同種なのである。

実際 rabbit をその名に冠したキャラクターも bunny をその名に冠したキャラクターも彼等が全て同種のウサギであるという事実を反映して描かれている。具体的にみていくと、上記の rabbit の定義で注目すべき点として “lives in a BURROW (=a hole it makes in the ground)” というものがあるが、『ピーターラビット』シリーズのウサギのキャラクターは rabbit も bunny も穴に住んでいるということがよく言及されている。例えばピーターラビットが子供の頃、かつて彼の父親をパイにして食べてしまったマクレガー氏 (Mr. McGregor) の家に忍び込み散々な目に遭いようやく家に逃げ帰ってきた時の描写は: “He was so tired that he flopped down upon the nice soft sand on the floor of the rabbit-hole, and shut his eyes.” (*The Tale of Peter Rabbit* 64) である。またフロプシーバニー (Flopsy Bunny) はピーターの兄弟で同じ家に住んでいたわけであるからやはり穴 (rabbit-hole) に住んでいたことになる。*The Tale of Peter Rabbit* の冒頭に “Flopsy, Mopsy, Cotton-tail, and Peter. They lived with their Mother in a sand-bank, underneath the root of a very big fir-tree” (7) という描写がある。ここでは hole や burrow のような直接穴を意味する単語は無いが、巨大なモミの木の下に住んでいたというのであるから穴に住んでいたと言っているも同然である。ピーターのいとこであるベンジャミンバニーは子供時代に関しては特に家に関する言及は無いが、大人になりフロプシーと結婚し多数の子供をもうけた後は穴に住んでいることが次のようにベンジャミンの父親であるバウンサー氏 (Old Mr. Bouncer)² の視点で言及されている: “Old Mr. Bouncer was stricken in years. He sat in a muffler; smoking a pipe of rabbit-tobacco. He lived with his son Benjamin Bunny and his daughter-in-law Flopsy, who had a young family” (*The Tale of Mr. Tod* 11) 。

さらに、話者も登場キャラクターも rabbit と bunny の使い分けに無頓着である。例えば話者はベンジャミンバニーとフロプシーの間の子供達のことを “they were generally called the ‘Flopsy Bunnies’.” (*The Tale of the Flopsy Bunnies* 8) とする一方 “little rabbits” (*The Tale of the Flopsy Bunnies* 27) や “rabbit-babies” (*The Tale of Mr. Tod* 79) と呼ぶ場合もある。また、ベンジャミンバニーのことを “a little rabbit” (*The Tale of Benjamin Bunny* 7) と呼んだり、ピーターラビットとベンジャミンバニーの二匹を指して “those two rabbits” (*The Tale of Mr. Tod* 40) と表現したりもする。そもそも *The Tale of Peter Rabbit* の冒頭でピーターラビットたち四兄弟を “Once upon a time there were four little Rabbits, and their names were——Flopsy, Mopsy, Cotton-tail, and Peter” (7) と紹介しているにも関わらず、同作品で “Flopsy, Mopsy and Cotton-tail, who were good little bunnies” (16) とも書いているように rabbit と bunny の区別に無頓着であるのがわかる。登場キャラクターであるマクレガー氏もベンジャミンバニーとフロプシーの間の子供達のことを “six leetle rabbits” (*The Tale of the Flopsy Bunnies* 28)

と呼んでいる。

マクレガー氏に関してはピーターラビット、ベンジャミンバニー、フロプシーバニーといった個々のウサギのキャラクターの名前を知らないわけであり、彼自身が子供のわけでも子供に向かって話しかけているわけでもないから *bunny* ではなく *rabbit* を使っただけであると解釈することが可能である。しかし話者の場合は話が異なってくる。とりわけこれらの作品群の話者は “*I have never felt sleepy after eating lettuces; but then I am not a rabbit.*” (*The Tale of the Flopsy Bunnies* 7) のように時々 “I” として自分に言及しており、さらには “*I cannot draw you a picture of Peter and Benjamin underneath the basket*” (*The Tale of Benjamin Bunny* 44) や “*I have made books about well- behaved people.*” (*The Tale of Mr. Tod* 7) といったように、作者としての自分を前景化している。本稿で扱う『ピーターラビット』シリーズの四作品は、いずれも作中に登場するキャラクターではない第三者の視点での語りの形式で書かれている。それも上で見たように、話者である自分がこれらの話の作者であるということを強調している。よって地の文における *rabbit* と *bunny* が無頓着に使い分けられているということは、作者の何らかの意図の表れと考えることが可能である。

3. 固有名詞と一般名詞

ピーターラビットのラビットやベンジャミンバニーのバニーは一般名詞としての *rabbit*, *bunny* ではなく固有名詞であると解釈するのが適切である。それはまずピーターラビットの母親の名前がラビット夫人 (old Mrs. Rabbit), ベンジャミンバニーの父親の名前がベンジャミンバニー氏 (old Mr. Benjamin Bunny): “*The name of little Benjamin’s papa was old Mr. Benjamin Bunny*” (*The Tale of Benjamin Bunny* 31) であるからである。そしてフロプシーの姓は *The Tale of Peter Rabbit*, つまりピーターの兄弟として登場するだけでまだ子供だった頃には全く言及されておらず、ベンジャミンバニーと結婚した後、作品でいうと *The Tale of the Flopsy Bunnies* においてフロプシーバニー夫人 (Mrs. Flopsy Bunny) と言及されるようになる。つまり名前+ラビット又はバニーと呼ばれる登場キャラクターのラビット, バニーの部分は彼等の姓であり、固有名詞なのである。

前章で見たようにこれらの作品ではそれら固有名詞を持つ登場キャラクターを指し示す言葉として *rabbit* と *bunny* が無頓着に使われている。それらの使い分けに法則性を見出すのは不可能である。しかしそこに逆に意図を見出すことができるのではないか。ピーターバニーあるいはベンジャミンラビットとは決して呼ばれることはない。彼等を指し示す言葉がラビットだったりバニーだったり一貫性が無いのに対して名前+ラビットまたはバニーの時は一貫している。その対照性により、ピーターラビットのラビットやベンジャミンバニーのバニーは一般名詞ではなく彼等の姓であり固有名詞であるということが強調される効果があるのだ。

一般名詞としては *rabbit* と *bunny* が何の法則性もなく無頓着に指示語として使われている。さらに前章で見たように実際に名前+ラビットのキャラクターも名前+バニーのキャ

ラクターも同じ生態のように描かれている。そのため読者は **rabbit** と **bunny** が生物学的に同じであり、この作品群に登場するウサギのキャラクターは全て同種の動物であることを改めて印象付けられる。そしてピーターラビットのラビットやベンジャミンバニーのバニーのように姓を持たせることによりウサギの擬人化を図っている。なぜその動物一般を示す **rabbit** や **bunny** でなく全く関係の無い名前³ではないかという疑問は、それが擬人化の度合いを反映しているのであると考えられるだろう。**Rabbit** や **bunny** を姓とするキャラクター達は実際のそれらの動物と同じように巣穴に住んでいる。一方 **Fox** 等キツネに関係する英単語を名前に含まない **Mr. Tod** は人間のそれと同じような家屋を六軒も持っていてそれらに移り住んでいるという。ピーターラビット達はジャケットと靴を身に付けている時が多くそれらを大切にし、また大抵人間のように二足歩行をしているが、本物のウサギ同様裸足で四つ足のほうが速く走ることができる: “After losing them, he ran on four legs and went faster” (*The Tale of Peter Rabbit* 35)。ラビット夫人は人間相手の商売で生計を立てていたり: “she earned her living by knitting rabbit-wool mittens and muffetees (I once bought a pair at a bazaar). She also sold herbs, and rosemary tea, and rabbit-tobacco (which is what we call lavender).” (*The Tale of Benjamin Bunny* 11), 人間の社会に買い物に行ったりする: “Then old Mrs. Rabbit took a basket and her umbrella, and went through the wood to the baker’s. She bought a loaf of brown bread and five currant buns.” (*The Tale of Peter Rabbit*)。また大人になったピーターラビットはキャベツ畑を所有しキャベツを育てている: “Benjamin used to borrow cabbages from Flopsy’s brother, Peter Rabbit, who kept a nurse garden.” (*The Tale of the Flopsy Bunnies* 11)。このようにウサギのキャラクターは人間と同じような生計の立て方をしていて、つまり擬人化されている一方で、本物の野生のウサギと同じように人間の畑から野菜等の食糧を盗んだりもする。人間の側の彼等に対する態度も様々である。上記のラビット夫人の人間相手の物の売買は全く問題なく行われているようである。つまりこの時はラビット夫人は人間から同じ仲間のように扱われているのだ。完全なる擬人化である。一方マクレガー夫妻は自分達の畑に侵入して野菜を食べたり盗んだりするピーターやベンジャミンに対して人間の泥棒に対して採るであろう警察に通報したりという対処法ではなく、ごく普通に害獣に対するように扱う。またピーターの父親をパイにして食べてしまったりフロプシーの子供達の皮を剥いで時計をかけるひもを作ろうとするという、人間に対しては絶対にしない行為を実際に行ったり行おうと考えたりする。彼等を人間とは全く異なる存在である動物だと見なしているからに他ならない。マクレガー夫妻に関してはウサギのキャラクターは全く擬人化されていないのである。ウサギのキャラクターの名前に付いているラビットやバニーは『ピーターラビット』シリーズの作品における立ち位置、ウサギ達自身の視点からも人間の側からの視点からも、ある部分は擬人化されていてある部分は本物のウサギとして描かれている、という微妙な存在であることを反映していると解釈が可能である。

4. 『不思議の国のアリス』の rabbit と hare

Rabbit と bunny は生物学的には同じものを指すのであり、『ピーターラビット』シリーズに登場するウサギのキャラクターは全て同種である。それと対照的に *Alice's Adventures in Wonderland* に登場するウサギのキャラクターであるホワイトラビットの rabbit とマーチヘアの hare は生物学的に別種の存在である。2章で引用した *Longman Dictionary of Contemporary English* の rabbit の項目にも “compare HARE” と書かれていたが、同書の hare の項目のウサギにあたる定義は: “an animal like a rabbit, but usu. larger, with long ears, a short tail, and long back legs which make it able to run fast” (478) となっている。『ピーターラビット』シリーズでは登場するウサギのキャラクター達が穴に住んでいることが言及されているのを見てきたが、実際 rabbit と hare の違いの大きな特徴の一つは巣穴に住むかどうかということである。それが rabbit と hare の正式な和訳にも反映されている。『カレッジクラウン英和辞典』で rabbit の項目 1 は「アナウサギ, ラビット(野ウサギ(hare)より小さいウサギの種類で地中に穴を掘って群居する習性がある)(→warren); 飼うウサギはこの飼育種である; 非常に臆病なので臆病者の代表のように用いられる」(1597)であり, hare は「野ウサギ(rabbit より大きく耳も長い; 通例野原などに住み穴居しない; →jack rabbit)」(900)である。ウサギを生物学の観点から研究している川道武男も:

「野ウサギ」と「穴ウサギ」という区別がある。欧米の人は、野ウサギ (hare ヘア) と穴ウサギ (rabbit ラビット) の区別にかなりこだわる。研究者も、このウサギはヘアなのかラビットなのかと議論するのが好きである。彼らが住む土地には、現実に二つの異なったタイプのウサギが生息しているかである。……穴ウサギは巣穴を中心に生活する。典型的な穴ウサギの種はアナウサギで、ワーレン (warren) と呼ばれる巣穴が集中している場所で集団生活をしている。日中の大部分をワーレンの地下で過ごしていて、夕方になると外出する。一方野ウサギは基本的に巣をもたない。典型的な野ウサギはノウサギ属で、どの種も特定の巣をもたない。日中は地面のくぼみやしげみの下に単独でひそんでいる。(44-45)

と定義している。このような実際の rabbit と hare の習性が *Alice's Adventure's in Wonderland* のホワイトラビットとマーチヘアのキャラクター造形に反映されていると安井泉は述べている:

『不思議の国のアリス』の冒頭、アリスは白ウサギ (a white rabbit) を追いかけます。白ウサギが巣穴に飛び込むところが見えたので、自分も巣穴に飛び込んでしまいます。この白ウサギは a white rabbit として登場しますが、the Rabbit と大文字で始まる固有名詞のように言及されていきます(初版)。rabbit は巣穴を作る動物なので、アリスが巣穴に入るという筋立ては動物学的に見ても正しい筋立てとなっています。これが三月

ウサギ (the March Hare) のように rabbit ではなく hare であったとしたら、おかしなことになります。rabbit よりも大型の hare と呼ばれるウサギは野原に生息しているのですが、巣穴を作る習性はありません。hare の後を追いかけて巣穴に入ったとなると、動物学的に整合性が取れない筋立てとなってしまいます。(189)

安井の主張は一見説得力があるように見える。ホワイトラビットが飛び込みアリスがそれに続いた穴が『ピーターラビット』シリーズでよく巣穴の意味で使われていた rabbit-hole と呼ばれていることもそれを後押ししている。しかしよく考えるとこれは不完全であると言わざるを得ない。それはホワイトラビットは確かにこの rabbit-hole に飛び込んだがこの穴に住んでいるわけではないからである。この穴はホワイトラビットの巣穴ではないのだ。ホワイトラビットの家は地下の世界、つまり不思議の国に人間の家屋と同じような形態で存在する: “As she said this, she came upon a neat little house, on the door of which was a bright brass plate with the name ‘W. RABBIT’ engraved upon it.” (Lewis Carroll 24)。⁴ またマーチヘアの家も存在する: “She had not gone much farther before she came in sight of the house of the March Hare: she thought it must be the right house, because the chimneys were shaped like ears and the roof was thatched with fur.” (Carroll 51)。これも実際の hare の生態に合致しない。何故なら、ウサギが人間と同じような家屋に住んでいるということは不思議の国であるのだから不問にするにしても、実際の hare は穴に居住しないだけでなく基本的に巣を持たないからである。よってホワイトラビットは穴に飛び込むから rabbit, マーチヘアにはそのような描写がないから hare と使い分けたのであろうという解釈は単純には成り立たないのである。

そこで rabbit と hare を分けるもう一つの大きな点、人間に飼われるということに注目してみたいと思う。Longman Dictionary of Contemporary English の rabbit の項目に “which is often kept as a pet” という箇所があり、『カレッジクラウン英和辞典』の rabbit の項目にも「飼いウサギはこの飼育種である」とある。そしてこの「飼いウサギ」ということとホワイトラビットのホワイトという体色の関係を検証する。日本ではウサギといえば白のイメージが定着しているが、世界的にはそうではないようである。これらのことについて川道は次のように分析している:

ウサギのイメージとして、白い毛と赤い目がある。卯年の年賀状に決まりきったように使われる姿であるが、白い毛で赤い目のウサギは野生では存在しない。白い毛は、冬に雪が積もる地域に生息するウサギの冬毛だけにみられる。ウサギ目約六四種のうち、冬に白くなるのは五種だけである。また、赤い目をもつ野生のウサギもいない。野生のウサギの目は褐色か黒色である。ウサギは欧米で人気のある野生動物であるから、ウサギのイラストや漫画はよくみられる。しかし、白い毛で赤い目のウサギはまったくといってよいほど描かれていない。ところが、日本では、絵本のウサギはすべ

て白い毛で赤い目である。なぜ白い毛で赤い目がウサギのイメージとして日本人の頭の中に定着したのだろうか。赤い目をもつウサギは、突然変異で生じた色素のないアルビノ（白子）で、自然状態ではごくまれにしか現れない。このアルビノのウサギは色素がないため毛も白くなる。色素がないため眼球は透明になり、その奥にある血管を流れる赤血球のせいで、目が赤くみえる。一方、冬に白毛に換毛するユキウサギは、アルビノではないので、目が黒い。カイウサギは野生のアノウサギを家畜化したもので、日本には一六世紀頃オランダからきたとされる。明治になってウサギの輸入と飼育が熱狂的になり、いろんな国から輸入された品種が混じりあい、「日本白色種」という品種ができあがった（『兔の飼育と経営』 218）。この日本白色種はアルビノを品種として固定させたもので、白い毛で赤い目であった。（13-14）

長々と引用したが、白いウサギは欧州でアノウサギ、つまり *rabbit* を家畜化して人工的につくられたカイウサギであり、野生にはアルビノのような特殊なケースしか存在しないものであるというわけである。そしてカイウサギも当然 *rabbit* である。ホワイトラビットはカイウサギであろう。そしてカイウサギであることを表すためにホワイトにしたと思われる。これは『ピーターラビット』シリーズのウサギのキャラクター達と比べるとよくわかる。『ピーターラビット』シリーズには *rabbit* 及び *bunny* が数多く登場するが、彼等は薄い茶色に描かれていて白い体色のウサギは皆無である。つまり『ピーターラビット』シリーズの *rabbit* や *bunny* はカイウサギではないということだ。実際、人間に飼われているウサギは登場しない。

「人間に飼われている」という事を示唆するものはホワイトラビットのキャラクター設定の随所に見られる。勿論第四章に登場する子犬⁵以外全ての動物が多かれ少なかれ擬人化されている不思議の国であるから現実のウサギのように文字通り人間に飼われているわけではない。しかしホワイトラビットは明確に人間に仕え、かつ恐らく主人にあたる公爵夫人 (the Duchess) を恐れている唯一の動物キャラクターである: ““The Duchess! The Duchess! Oh my dear paws! Oh my fur and whiskers! She’ll get me executed, as sure as ferrets are ferrets! Where *can* I have dropped them, I wonder”” (Carroll 24) と言いながらパニックに陥っているほどである。チェシャ猫 (the Cheshire-Cat) などはホワイトラビットのように二足歩行でないし服も着ていないので公爵夫人に文字通り飼われているという印象が一見強いのだが、実際には遥かにホワイトラビットより独立独歩である。またホワイトラビットはこの不思議の国の支配者であるトランプの王 (the King) とハートの女王 (the Queen of Hearts) に忠実に仕えている。女王の行列に加わっていたり、裁判では伝令官を務め、証言より評決が先等々筋の通らないことばかり言う王をなだめすかして事実上裁判を取り仕切っていたり、また王自身困った時はホワイトラビットに助け船を求めるほどであるのだから: “The King looked anxiously at the White Rabbit” (95) , かなり高い地位に就いているのであろう。これは人間⁶の世界の完全な一員となっており、かつ模範的な行動をとっている

ことの証明でもある。これも人間に飼われていることの一形態と言えるのではないか。前章でみたように『ピーターラビット』シリーズのウサギ達も人間相手の商売で生計を立てたり人間社会に買い物に行ったりしており、それが人間達にも自然に受け入れられている。その面では彼等も人間の世界の完全な一員となっている。しかし彼等は実際の野生のウサギと全く同じように行動したり人間にそのように扱われたりもする。その不完全さがカイウサギの白でなく薄い茶色という体色に現れているのではないか。人間の世界のシステムに完全に組み込まれそこでルールに忠実に従って生き、見合ったポジションを占めているホワイトラビットは理想的に人間に飼われている rabbit なのである。

一方マーチヘアは人間である帽子屋と友達のようにみえるが、彼等の関係はよくわからない。マッドティーパーティー (Mad Tea-Party) では帽子屋と共同歩調をとってアリスを小馬鹿にしたり、ヤマネ (the Dormouse) を両側からひじ掛け代わりにしていたり: “The March Hare and the Hatter were having tea at it: a Dormouse was sitting between them, fast asleep, and the other two were using it as a cushion, resting their elbows on it, and talking over its head.” (53), 二人がかりでヤマネをティーポットに押し込めようとしていたりしていた: “The last time she saw them, they were trying to put the Dormouse into the teapot.” (61)。ここだけを見ると彼等は友達、それも悪友同士のような印象を与える。しかし法廷の場面になると彼等の関係が全く別のものに見えてくる。第一の証人として帽子屋が召喚されるのだが、彼の後ろに続いて出てきたマーチヘアはマッドティーパーティーでは帽子屋と一緒に虐めていたような感さもあるヤマネと腕を組んでいるのである: “The Hatter looked at the March Hare, who had followed him into the court, arm-in-arm with the Dormouse.” (91)。そしてマーチヘアは帽子屋を全く助けようとしな

“I’m a poor man,” the Hatter went on, “and most things twinkled after that—only the March Hare said——”

“I didn’t!” the March Hare interrupted in a great hurry.

“You did!” said the Hatter.

“I deny it!” said the March Hare.

“He denies it,” said the King: “leave out that part.” (94)

これらを総合的に考えるとマーチヘアと帽子屋は友達でもなんでもなく、マッドティーパーティー同様支離滅裂な関係と解釈するのが適切である。さらに注目すべきことは法廷の場面で帽子屋が王に対して卑屈なまでに恐れおののいているのに対し、マーチヘアは全くそのようなことはないということである。人間である帽子屋がその世界の頂点に君臨する王を恐れ足下に平伏するのは当然であろう。しかしその世界の中に生きているわけではないマーチヘアは恐れる必要がないのである。人間の世界のシステムに組み込まれている、つまり人間に飼われているホワイトラビットと異なりマーチヘアは自由気ままなアウトサ

イダー的存在なのだ。一方、前述のようにホワイトラビットはこの法廷の場面で王、女王ら人間の権力体制の側で重要な働きをしており、まさしくマーチヘアと好対照をなしているのだ。

結局 **rabbit**, それもカイウサギの特徴と **hare** の特徴がそれぞれホワイトラビットとマーチヘアに反映されているということがいえる。よってホワイトラビットはラビット, それも体色の白いラビットでなければならず, マーチヘアはヘアでなければならなかったのである。登場する場面が少ないマーチヘアはホワイトラビットがラビットである必要性を対比によって際立たせることが一番の存在意義であるともいえかもしれない。つまりホワイトラビットがラビットであることを読者に意識させるためにルイス・キャロルが登場させたキャラクターとでもいうべきか。

5. おわりに

本稿では、ウサギの登場する近代イギリス有名児童文学である『ピーターラビット』シリーズと『不思議の国のアリス』において、日本語では全てウサギと訳される **rabbit**, **bunny**, **hare** がどのように使い分けられているか、それによってどのような効果もたらされているかを論じてきた。簡単に振り返ってみれば、『ピーターラビット』シリーズでは生物学的には同じ **rabbit** と **bunny** をキャラクターの姓、つまり固有名詞として使う場合は一貫性を持たせており、一方指示代名詞、つまり一般名詞として使う場合は一貫性が見いだせない。そしてそれがウサギのキャラクターの擬人化の度合い、作品群における微妙な立ち位置を反映しているのであった。一方『不思議の国のアリス』では **rabbit**, **hare** という生物学上でも異種の存在を名前に冠したウサギのキャラクターがそれぞれの実際の種族の特徴を反映している。ホワイトラビットに比して作中での存在感がかなり小さいマーチヘアはホワイトラビットが **rabbit** でなければならないことを印象付ける役割を果すためのキャラクターともいえるのであった。

さらに『ピーターラビット』シリーズのウサギのキャラクターとホワイトラビットを比較すると面白いことがわかる。前章でみたように『ピーターラビット』シリーズには人間に飼われているウサギは登場せず、実際に白色に描かれているウサギもない。そして彼等とホワイトラビットを比較すれば明らかに後者のほうが擬人化されている。彼は完全に人間社会の一員であるばかりでなく、人間の世界を成り立たせているシステムの中でかなり重要な役割を務め高い地位についている。『ピーターラビット』シリーズの **rabbit(bunny)** と『不思議の国のアリス』の **rabbit** はその体色によって擬人化の度合いを示しているのだ。『ピーターラビット』シリーズ及び『不思議の国のアリス』はウサギのキャラクター達をラビット, バニー, ヘアを使い分けて命名することによって現実の **rabbit**, **bunny**, **hare** の特性を反映させ、フィクションである前提の文学作品にある種の現実感を帯びさせているのである。

註

- 1 一般的に White Rabbit は白ウサギ, March Hare は三月ウサギと訳されることが多いが, rabbit, hare とのつながりを解りやすくするために本稿ではこの訳で通す。
- 2 しかし *The Tale of Benjamin Bunny* ではベンジャミンの父親の名前は old Mr. Benjamin Bunny であるとはっきり書かれているので, これは綽名あるいは呼び名のようなものであろう。
- 3 例えば *Winnie the Pooh* (『クマのプーさん』) の Winnie the Pooh (プーさん) などは bear に関係する英単語を全く含まない名前。
- 4 家の表札が W. RABBIT なのであるから White Rabbit というのがこのウサギのキャラクターの本名, つまり固有名詞であり, 白いウサギという一般名詞ではないと解釈できる。
- 5 夏目康子はこの子犬について「言葉を話さず、四足歩行で服も着ていない。その行動は、アリスが棒を投げれば喜んでそこに向かって駆けていくというもので、犬そのものの性質が強調されている。子犬は、通常の世界から不思議の国に紛れ込んでしまった動物と見なすことができ、不思議の国のほころびを表している。」(51) と論じている。
- 6 王や女王は擬人化されたトランプであるが、公爵夫人や帽子屋 (Hatter) が女王を恐れたり裁かれたりしているのだから彼等も不思議の国では人間と見なしてよいであろう。

引用文献

- Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland & Through the Looking-Glass*. New York: Bantam, 2006.
- 『カレッジクラウン英和辞典』東京: 三省堂, 1991.
- 川道武男『ウサギがはねてきた道』東京: 紀伊國屋書店, 1994.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. Essex: Longman, 1988.
- 夏目康子「『アリス』に登場する動物たち—擬人化と人間の動物化」*Mischmasch* (日本ルイス・キャロル協会) 19 (2017): 47-55.
- Potter, Beatrix. *The Tale of Benjamin Bunny*. London: Penguin, 2002.
- . *The Tale of Mr. Tod*. London: Penguin, 2002.
- . *The Tale of Peter Rabbit*. London: Penguin, 2002.
- . *The Tale of the Flopsy Bunnies*. London: Penguin, 2002.
- 安井泉「ルイス・キャロルのことばと文化」『ユリイカ 3 月臨時増刊号—150 年目の『不思議の国のアリス』(青土社) 47 (2015): 189-197.

(2018年12月25日 受付)
(2019年 2月25日 受理)